

平成 30 年度 「スラブ・ユーラシア地域（旧ソ連・東欧）を中心とした総合的研究」に関わる「共同利用型」の個人による研究 研究報告書

平成 31 年 4 月 29 日現在

研究課題名	1920-30 年代のロシア経済学と日本の経済学 — A. N. アンツィフェロフを中心に	
申請者	氏名	所属機関・職
	大槻 忠史	東京外国語大学・特別研究員

研究成果の概要

本課題は、1920-30 年代のロシア経済学が日本の経済学、経済学者に与えた影響について、特に A. N. アンツィフェロフ(1867-1943)を中心に考察することを目的とする。

従来、戦間期の日本の経済思想・学説史研究では、ドイツ(歴史学派)やイギリスなどからの影響がその中心であった。一方、ロシア経済学の影響は、N. D. コンドラチエフら A. V. チャヤノフらを除き、ほとんど知られることはなかった。申請者は、後者について 2016 年度に「共同利用型」制度の利用により、資料の収集を行った。その際に、新たに考察対象として浮かび上がってきたのがアンツィフェロフである。今回 2 度の滞在期間中に重点を置いたのは、(1)彼の著作および先行研究の収集、(2)日本における彼の著作の翻訳とその受容状況についての資料収集である。

(1)については、調査時点では北海道大学のみ在所蔵確認されたロシア語および英語の著作を収集した。これらは、ロシアの農業分野に関するものに集中している。(2)については、それらの翻訳や翻訳発行元が刊行する関連資料などを入手した。これら資料から現状分かることは、以下の 2 点である。まず、アンツィフェロフの研究は、主に英語著作を通じて同時期の日本に紹介されたが、学術的検討はほとんど見られないということである。一方で、戦時期日本政府の対ロシア政策との関連上、ロシアの農業状況を知りうる数少ない重要な資料として機能したということである。これは、チャヤノフと同様と言える。これらの詳細な分析は、今後さらに進める予定である。

このような機会をくださりましたスラブ・ユーラシア研究センター、また滞在期間中はもとより、その準備段階からお世話になりました北海道大学附属図書館の方々、およびセンター事務室の方々にお礼申し上げます。

主な発表論文等（雑誌論文、学会発表、図書 等）

2020 年 5 月に北海道大学で開催予定の経済学史学会全国大会において、収集資料に基づく報告を行う予定である。

当該研究活動を基に応募中の研究プロジェクト（科研費等）

該当なし。

※枠を調整することは構いませんが、ページは追加しないでください。